



ティ

BREAK

ホームレス ホープレス

ホームレスには 金がない
中古の軽乗用車の中で寝てる
食べ物は パンとバナナと たまに牛乳
でも大きな夢がある
ミュージシャンになること

ホープレスには 夢がない
それなりに大きな家と 庭がある 車もある
誰とも話さずに はや何年
庭の緑を見ても 癒されない

ホームレスと ホープレス 駅前で出逢った
ホームレスは驚いた この人なんていい服を着ているんだろう？
ホープレスは驚いた その輝く少年のようなまなざしに

暗い軽乗用車の中で 少しだけ喋った
ホームレスが言った
「そうか そんないい家にひとりで住んでいるのか
僕はいつも中古の臭い車の中で 移動しながら寝てて
たまにクラクションを鳴らされるのに」
ホープレスが言った
「大きな家も庭もいないから 夢が欲しいよ」

少し気まずい沈黙
絶対にわかりあえないと思ってホームレスが口を開いた

「食べ物は水とスーパーの捨てる野菜とバナナ
どこへ行っても追い出される
そんな生活あんたに耐えられるかい
服だって あんたいいものを着ているのに 何が不満なんだ
僕のは20年前の服だが」

ホープレスが口を開いた
「理想とどれだけ 離れた生活をしていても

あんたには大きな夢があるんだろう 目の中に太陽があるんだろう
その夢のためにホームレスになったんじゃないのかい
僕には何の夢もないや もう最近はね
明日死んでもかまわないって思うんだよ
どれだけそれが苦しいか
ホームレスのあんたには わからないだろうな」

力は言った
「お前はまだ生まれる前だが
生まれてから残念ながら ひとつ重い病気を背負う運命だ
ただしそれは選べる
何がよろしいか」

僕は迷いに迷って 最終的にもはや迷わず
きっぱりとこう答えた

それは読み終わったあとの
あなたの心に聞いてみてください。

おもち

10年前 まだ学生だった頃
僕らは ひみつの木の下で ある約束をしたんだ
合言葉を 10年後 覚えている奴だけ
本当の親友と見なそうと

誰も思いつかないような 忘れてら思い出せないような
ヘンな合言葉を必死に考えて テストの裏に落書きしてた

ある友人は紙にメモした ある友人は頭に忘れまいとメモした
10年後の僕らなんてあるのか 想像もつかなかったけど
ひみつの木の下で別れて それぞれの人生を歩み出した
紙はどこへ行ってしまったのだろう
頭のどこへ行ってしまったのだろう
言い出した僕だけが 謎の宗教みたいに覚えていたさ

10年後のその日 もう学生じゃなかった頃
僕は休みを取って ひみつの木の下に来た
誰も いなかった
今日が平日だって事を 10年前の僕らは知らなくて
強い風に心が飛ばされた人のように
細い目で遠くを見ていた

あれは誰だろう 青い人影 風に吹かれて待ち続けて
正直 誰だか解らなかった
「遅れてごめん」っていう声で解った 君だった
たった二人 君と僕 君と僕 その答えで本当によかった
合言葉は
「まる さんかく しかく おもち」

小さいころの私は、
家族や友達にかこまれて、とても孤独だった。
学校で何かの賞をもらった。
うれしかったけど、水路に捨ててしまった。

体育の授業中、誰かとブランコの立ち乗りしてた。
かなり叱られた。誰だったんだろう。
中学生のころ、歌に出てくる「君」って誰だろうって思った。
「君」と呼べる人が、誰もいなかった。

ずっと孤独だった。
ずっと孤独だった。
君の笑顔を、届くけど届かないベンチで見ている。
飛んでくるバレーボール。思わず受けとめる。

笑顔は得意じゃないんだ。
君が走ってくると青空のように笑えるんだ。
ボールを君にわたす。かくれ涙が伝う。
ちょっと昔話を思い出しただけ。なんて。

朝昼夜

朝も昼も夜も嫌いだよ

朝なんかいらぬ

顔洗ったり 食事したり 面倒なだけ

夜なんかいらぬ

ただ何も出来ずに時間が過ぎて 朝を待つだけ

昼は もう言いたくない

とりあえず家に帰ってきて もう午後10時を時計がさしてる

もう寝なさいってさしてる

朝と昼と夜があったって だから何だよ

淡々と 朝と昼と夜を 仕事や宿題みたいにこなして

そこの真ん中に自分はいなくて 僕らは何がやりたいんだ？

君に逢いたい 君に逢いたい 君とどっか行ってしまいたい

目をつむっても未来は見えぬじまい

君に逢いたい 君に逢いたい 駐車場を追い出されたら

森の中の宇宙へ行こうか

僕らは何がやりたいんだ？

朝、顔を洗って 夜、寝て だから何がやりたいんだ？

紙が壊れていく音がして

神経が部屋中にひびきわたってる うるさいくらいに

あなたは一体 何がしたかったの？何をしたいの？

吐きそうなくらい あたし勇気にあふれてる

荷物をつめる

このまま終わりたくない
今日中あと2時間以内に 君に逢いたい
車の方へ 適当なサンダルで走っていく
君に逢いたい 君に逢いたい
そしたら朝も昼も夜もいない
欲望が尽き果てたなら もうそれ人間じゃないから
たとえ希望を奪われても 欲望を隠し持っていたい
君に逢いたい
少なくとも 何かずっと叫んでいたい
今日中に 君に逢いたい あと2時間ない
欲望さえあれば 朝も昼も夜もいない
君に逢えるなら 君といられるなら 朝も昼も夜もいない

バベルの塔

LEDとろうそくのはかない知恵は
同じものでしょう

クレオパトラとあなたの笑うタイミングは
きっと同じでしょう

人間はついに神様を倒して
バベルの塔ができましたとき

神様より大きな存在がある事
気付かずにいましたとき

バベルの塔を見上げる人々
下を向いてしまうのは私だけでしょうか

だって塔が立っているのは泥の沼
いつか大地がかたむいて雨が始まる

ねえ もっと近くに寄ってきて
思い切り抱きしめていいかな

夕日を見て「明日来るかなあ」って思うのは
始皇帝も私も同じでしょう

下の名前で呼んでもいいかな
もう上下関係抜きでタメで
貧乏なのに宝くじを買う人みたいな気持ちだった
意外にも君さんのくちびるは「いいよ」って動いた

入学式でも結婚式でもない
誰かの口笛が飛んでいくようなあの小春日和の日
それが二人の記念日になったんだ

派手でピアスが好きな背の高い君と
捨てたタバコみたいなあたしが友達になったあの日
それから毎月その日になると
メールを交換
何も無い事を喜びあった

君はいつも上を向いていた
冬の青空が大好きみたいで
あたしは日の光がまぶしすぎて
君のスニーカーのひもが揺れるのばかり見ていた

あたしは派手で背の高い君を
タメで呼ぶのがなんだか怖くて
甘えるフリをしてこっそり震えていて
いつか君の見た目のように大胆に裏切られるなんて思っていて

君を疑う子犬の目があからさますぎて

ずっと前髪で目を隠してた
バカなあたしは
君の方が年上って忘れてて
いつか自分から裏切ってた
君が「木がハゲてる」って言ったら
自分の事かと思った
ハゲてないのに

その年の記念日
午後11時まで待ってもメールは来なかった
思った通りに虚しく電源を切った
何も無い事 何でもない事 平和な事 君がいる事
君が好きで
君が好きで
今頃言いたい事他に無いよ
君の歩く姿は
乾いた空のようにキラキラ光って
あたしの姿は雪の後の道路みたいに汚れてて
でも何か怖くて
何か怖くて

君が好きで
何より裏切った自分が怖くて
君のレザージャケットよりずっと怖くて
君が好きで
怖くて汚くて涙あふれて
君が好きで それ以外に何も無い
君が好きで それ以上意味が無い

これは君が好きだと言いたかったから
適当に作ったストーリー
君が好き それ以外言いたい事何も無い

君が好き 君が好き

それ以外意味も何も無い

力は言った

「お前がその病気を選んだとき 私には全てが解った
お前にもそれなりの覚悟があるのだろうか？」

僕が言った

「もちろんです

「僕は最初から

破壊するために生まれてきました
だから運命とかあなたの言うものには
負ける気がしない」

力は言った

「面白い

私はならばお前が生きている限り
その破壊とやらを見守るとしよう」

あなたのために歌われた歌など無い

あなたのために歌われた歌など無い
僕は本当の事を言っているだけ
知り合いがミュージシャンでない限り
そんなもの無い

きっと昔の誰かが
大好きな別の誰かに
落ち葉が心まで真っ赤だよ、って
伝えようとして
その人のための歌ができたのでしょうか

別の誰かが
日が沈むのが早くて心が寂しい、って
でも大切な人が
いっぱいいて

大切な人全員に
どうにか伝えてやろうとして
寝れずに食べれずにずっと考えて
「あなた」や「君」という言葉をひらめいて歌い始めた

でもその人は
時が過ぎて当然いなくなって
「あなた」や「君」に歌う歌だけが残って
深く意味も苦しみも考えず
人々は「あなた」や「君」に歌う歌を作り続けた

あなたのために歌われた歌など無い
とてもすてきな妄想です
みんな自分のために歌われたと思ってるから
明日仕事に行けるんです

あなたのために歌われた歌など無い
すばらしいのはあなたの才能です
自分の事だと思いこんだあなたは無敵です
妄想を大切にしてください
もっともっとみがいてください
ロマンチックなのは 僕らのいいところだから

存在しない人の温もりを信じて妄想
歩くあなたは無敵です
「あなた」「君」としか言えない僕らは
まだまだ先へ行けそうです

今日も僕は妄想気味です

まんまるお月さま

夜が一番好き

階段から落ちても何も言われなから

外であいつの声もしないから

月へ行くんだ

君はどこから来たの どこへ行くの

こんな妄想めいた話は好きじゃないだろね

うさぎとあいつはやっつけて

月へ行くんだ

夜が深まったら 帰ってきたら

閉じたまつ毛の上に足を踏み出して

お月さま行きの空飛ぶ夜行列車に乗る

さすがに面と向かっては言えなくてでも

月へ行くんだ

飲みかけのソーダが苦くなる

勇気なんかどこにもない 優しさならあるつもり

まんまるお月さま

まんまるお月さま

月へ行くんだ

現実しか見ない君は

月を見るとかあんまり好きじゃないでしょう

僕が月にいるならたまに見てくれるかな デスクから

まぶたの中だけの甘いクスリみたいなストーリー

なぜか涙がひとすじ流れたんだ

優しいって嘘ついたかな

月へ行くんだ

現実主義者の君と逃避主義者の僕

スマホ手に取った
君は「ただ逃げてるだけじゃないの？」って
「そんなつまない事で
僕を捨ててどこへ行くの？」
まんまるお月さま
まんまるお月さま
声が出なかった

まんまるお月さま
まんまるお月さま
今でも見上げると声が出ないや
夜行列車が今日もまた遠ざかって行くよ
限りある永遠の中で
君といっしょに夢を見るんだ
温暖化とあいつはうさぎに食わせておいて
まんまるお月さま
僕らの悩みは
月へ行くんだ

給料

袋を開けたら なんと 2700円が入っていた
すげえなあ
週1で1時間しか働いてないぞ 俺

とりあえずメロン食いたい
メロンの旬はいつでしょう
メロンを自分で買った事もないな
2700円で買えるのかしら

よく産地のわからない メロンを買ってみた
食べるのはいつごろなのか
とりあえず叩いてみた よけいにわからなくなった

そしてメロンは 冷ぞう庫に入れるものなのか
それとも意外に日光にあてておいたら甘くなるのかなあ
何故か 新聞紙で包んでみた
意味は 別にないけど

そしてちょっと忘れてて クッキーをこぼしながらかじってて
後日 叫びながら 斬ってみた
その中身は
yeah

ナイフの死神さん

学生の頃 あるマンガを読んで感動した

そうかやっぱり私は

面白えもんには目がねえわ

読書感想文→嫌い

体育→サボりすぎ

好きな詩人→誰も知らない

恐怖の大王アンゴルモアは降りてこなかったけど

かわりに死神が降りてきた中学生の頃

僕の友達は死神になった

自分の心とはナイフの事だった

ボロボロに輝くナイフの事だった

マンガでいつか見た死神にとりつかれて

棚のガムを盗んで逃げた

記憶が脳ミソのようにまざってしまって

真冬の手錠が冷たかった事以外

あんまり覚えてないんだ

自分が二人いた

間違ったガス入れた風船のように笑ってるバカ

ベッドの中で折れそうになってるバカ

面白えものなんて何も無かった

死神と会話する現実があるだけ

せめて面白えものを そこらへんの紙に書いてみた

重要な書類だったに違いないけど

たぶん そんなに面白えもんでもなくて 意味不明

でも私はそれを心から面白えと思ったんだ

自分の心とは たぶん最初から ナイフの事だった

欠けてるのが 逆に危ないナイフの事だった
まだ幼くて 気付かないで傷つけ傷ついていただけ

私はそのボロのナイフで
面白えと思ったものを作り始めた
そして大人になって 死神が去っても
書類→嫌い
運動→嫌い
マンガ→すき
好きな詩人→誰も知らない
やっぱり俺は
面白えものにしか興味ねえなあ
そしてもう持ち手がない危険なナイフで
刻みつけていくのさ

卵寒天

電動映像音声機を見ながら卵寒天をさじで食べる
画面の向こうで有名な氷上滑走選手が
質疑応答を受けていた

私はあの人のような超的超新星に
きつとなれないだろうな
卵寒天 姿勢が悪くて ちょっとこぼしてしまったよ

でも追い抜いて自分が上になろうだなんて
少しも思わないな たまに思うけど
一人一人才能が違う事を
誇ってるうちは なれないな

負けず嫌いな所とか 少しも無いな あるけど
誰かを尊敬できない人が本当の負け犬だと思うし
電動映像音声機の地上波のその向こう
会った事も無いその選手の幸せを願ったんだ
その選手はきっと知らないだろうけど 幸せを願ったんだ

卵寒天 さじでひとすくい かわいい心が欠けてゆく 月食のように
若くて美人でも超新星でもなくて南蛮三味線が弾けなくて
壱億分の壱のたったひとりに過ぎなくて
誰かを落とすとか勝ち負けじゃなくて 不戦勝じゃなくて
自分の努力が甘過ぎて
それでも それでも

今日の匂いは印度香辛煮かなあ

さじが四次元たらいに落ちてゆく

私っていう生き物はね

結局笑顔もらえないと救われないんだよ

だから有名になれなくても 笑顔がかわいい人でいたいし

君を笑わせるんだ

イエスウーマン

若い男の子としゃべってる私
話題がよく通じて
プレステ2だのスターウォーズだの
ロードオブザリングだので盛り上がってるの
あの叫んでる歌の
叫んでるところがいいとかどうのこの
近くで見てたイエスウーマン
一人ずつ席を立ててく

ごめんね
私、美人だから
それしか才能ねえな
君らはまだ若すぎんだよ
それって「妬んでる」って言うの
イエスウーマンはイエスウーマンの仲間内がいいの
首をたてに振ってあればいいの
普通の顔の人集めて

自分が美しくないというそれだけで
写真もみんな破いてしまって
君らは自分を普通だと思っているでしょう？
君らは自分を世界一のブスだと
思った事無いでしょう？

努力が足りないの
すばらしい中身のせいなの？
鏡に言い聞かせたの
都会の駅に立つ私 泡になって消えてしまいそう
ファッション雑誌破って
スナップの人を気取ってみたりして
通行人をぼんやり見て
何をしているの？
何のための時間なの？
私がどこにもここにもいないの

私、美人でごめんね
それしか才能ねえな
群れる普通のイエスウーマン
中身が大切だって言うよね
いくらでも中身自慢してください
仲間内であいつは中身無いとでも言ってください
それで中身勝ってるとでも思ってください

自分の顔は
持って産まれるものじゃない
いつか気付くものだよ
イエスウーマン
自分を普通だと思った方がいい
もし世界一のブスと
思ってしまったなら
まだ若いイエスウーマン 群れからはなれて頂上を目指せ

力が言った

「私はお前を見守ると言ったが
試練は与えても
助けてやるなどとは一言も言わなかった
人の生き死になど私には興味が無い」

僕が言った

「あなたの助けなどいません
ただいつも言うように僕がやりたい事はひとつ
優雅にティーでも飲みながらくつろいで これを読んでいる誰かに
何かを破壊してあっと言わせる事です
病気などその中のひとつの武器に過ぎなくて」

力は言った

「私はお前を助ける気は無いと何度も言っているし 好きにするがよい
ただお前の言う破壊とやらは見たいのだ
寿命まで生かしてやるとも言わないが とても面白いな
人間はとても面白い生き物だ」

ニュースが言ってた

「100年後の世界は気温が…人口が…森林が…」

ちょっと待てよ

私100年後まで生きてないじゃん 君もそうでしょう？

一番幸せな時代に生まれた

何一つ不自由無い暮らしをしてきた

思い出の写真があせても アルバムが崩れるほどうれしい

パソコンもスマホも風邪薬もクーラーも車も保険も

何だってある

自分の惨敗ばかりを見て それでも前を向いてまた敗れる

そんな生き方も 雑誌読んでてふと アリかなって思ったんだ

大切な人をまた一人 どのように失ったって バングルは光る

黒じゃない黒のメガネケースが 寝転がるととなりにいる

黄昏に輝いたままの不幸なら

受け入れていけるほど 大人になりたいよ

誰かが私のザマを見て 不幸で残念だと笑うけれど

幸せに呪われている その誰かの方が不幸だと思うけれど

きっと小石一つも 見つけられないと思うけれど

一番幸せな時代に生まれた

原人の夢はたぶん もうここにある

だって何もかもここにはあるから

食事が冷めたって 火を起こせなくても

レンジで温めればいい

100年後の世界なんかどうでもいい

虫が秋を詩うように 私は今を詩う

一番幸せな時代に生まれて

きっと 一番幸せな時代と共に 消えていくんだね

本当に 良かった

本当に 良かった

マシンだらけのホタル

もう少しで息が壊れてしまうな
笑いすぎた時にもそう思うし苦しい時はやっぱりそう思う
昨日病棟に入る時 身体検査を細かくされて
なんて甘いチェックなんだ
心の中の物は全て持ち込み禁止にしてくれればいいのに

片田舎の景色は無理に都会のまねをして
川までつぶしてしまったからホタルさえいなくなった
小さい頃はホタルを 手で包んで家まで帰ってみたい

白いベッドにもぐりこんで
もう少しで息が壊れてしまうなって
マシンと呼吸の音しかしないだけ
私は一体何を求めて歩いているのだろう
外の景色を見たかったのか 自販機か鏡かそれとも
ガラスごしの夜景はマシンだらけのホタル
マシンの夜景をそっと手で包んだ

「おはよう」ってあなたが 君が 笑うと
心に違法に持ち込んだ悲しみに
マシンガンで穴が開いたんだ
いきなりの事でびっくりして
あなたの 君の 名前をきいた
自分の名前言うのも忘れて
「そのスカートかわいいですね」って言ってなぜか逃げた

スマホを持って
ベッドにもぐりこんで何時間経ったのだろうか

ふとんの中は真っ暗
あの方はどんな名前だったっけ
ちょっと動いた すぐるようにスマホを手で包んだ
明日 まあ失礼だけどまた名前をきこう
わけのわからない言い訳を考えて
今日初めてちょっと笑った
息も田舎も壊れてしまって
両手の中で何かがパッと光った
マシンだらけの ホタル

ティーBREAK

<http://p.booklog.jp/book/110302>

著者：雨野 小夜美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tinycolor/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110302>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/110302>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ